

トピックス
1. 仁淀川の天然うなぎ
2. 神無月 寒露～霜降の頃



福留経営労務管理事務所
 姫路龍馬会
 社会保険労務士・行政書士
 福 留 章

<h1>龍 馬 通 信</h1>	No. 22
	2019年10月号

神無月 ^{かんろ} 寒露 ^{そうこう} ～霜降の頃

羊の群れかともみまごうばかりの見事なうろこ雲が青空いっぱい広がって、実りの秋の到来を想う。秋分を過ぎると季節は加速度を増して移ろう。たわわに実った稲穂の上を飛びかう「秋茜」^{あきあかね}。赤とんぼという名前のとんぼがいる訳ではない。胴が赤いとんぼの総称。短い命を愛しむかのように澄んだ秋の気配の中をスイスイと泳いでいる。幼い頃に見た景色。故郷の黄金に色づいた田園の空が茜色に染まり、釣瓶落しの夕陽が沈み漆黒の夜長となる。秋という季節が好きな人はロマンチストだと言われる。

盛りの夏を過ぎて、陽ざしは和らぎ時折ひんやりとした北風が吹く。人々は落ち着きを取り戻し、去し方の日々を思い、反省と後悔に胸を痛める。

五穀豊穡を祝い、感謝し、祈る、祭りが終われば、季節は一足飛びに冬に向かう。年齢とともに一年の経過の早すぎることを思い、何をし、何をすべきであったかと自問自答する。うまくいかないことの多い世の中でわずかばかりの幸福の刻を、大切に思い日々慎ましく、生きていかんと心に誓う。



- ※寒露 10月8日頃。
- ※霜降 10月24日頃。

随筆 『龍馬と私』 ～ 龍馬生誕 ① ～

龍馬は天保6年（1835年）土佐国高知城下（高知市上町）の町人郷士坂本家の次男として生まれた。龍馬の幼少期については、よばったれ（寝小便たれ）で泣き虫だったという。塾通いもケンカをしてすぐやめたり門前で立小便をしてやめさせられたり。正規の学問を修めた形跡はない。殆ど耳学問で、精読して身につけるということではなく、耳から聞いて直感でその核心をつかむということに非凡な才があったようである。

早く母親を亡くした龍馬は、すぐの上の姉である、坂本の仁王様と呼ばれた、乙女姉の薫陶を受けて成長を遂げる。二度の江戸での剣術修行など実家が裕福でなければできないことではない。

当時は長男以外は皆、無職であった。才谷屋の力があってこそ、龍馬は経済的な束縛を受けずに、その個性を伸ばすことができたとも考えられる。「龍馬が行く」の著者、司馬遼太郎はその随筆の中で偏差値偏重が人間形成においていかに無意味な事であるかを述べている。

昭和の時代、大学進学をからめて偏差値がその人の価値を決めた。その例えとして、高知県は偏差値については最下位のグループに属するが、幕末から明治、大正、昭和と政治経済の分野において多くの日本を代表する偉人賢人を輩出している。「自由は土佐の山間より出ず」とまで称賛されたその県民性は偏差値というものの無意味さを現実をもって証明しているというのである。



司 馬 遼 太 郎

1923年(大正12年)～1996年(平成8年)

経済的には恵まれた龍馬も、土佐の厳しい身分制度の中で何度も挫折しかけている。考えてみれば薩摩の西郷隆盛や大久保利通も同じような境遇であった。その苦境を超越して信念を貫き通した彼らの強さは、一体どのように育まれてきたのだろうか。歴史は「人々がどう生きるべきか」を史実をもって問いかけているような気がする。

仁淀川の天然うなぎ

姫路龍馬会は私が勝手にそう言っているだけで実体は何もない。

入会金なし、入会・退会自由の気楽な会である。「本物の鰻のタタキを食べる会」と称して小さなグループ旅行を始めて今年で3年目。固定している参加者もあるので今回は「本物のウナギ」をグルメに追加した。結果、会費はバス旅行にした事と相まって少々高くなってしまったけれど、11名の参加を得た。

グループでバス旅行となれば姫路駅を出発直後から酒、肴が出てドンチャン騒ぎというのが定番だが、今回は若干違う雰囲気となった。ガイドでもある私からの忠告。「本物のウナギ」を食べるのであるからそれまではなるべく飲食をせず我慢をするようにアドバイスをしたからである。美味しいものを食べる時に最善の状態を食べることは私の信念とするところ。ちなみに私は普段午後4時を過ぎるとビールの最初一杯を最高の状態で飲む為に一切の飲食をしないことにしている。

さて、定刻の12時に到着（佐川町）。創業大正2年の老舗「大正軒」は古い旅館のような風情。2階和室にテーブルを並べた部屋に通される。客の顔を見てから焼きに入るといふ伝統と秘伝のタレで有名なお店。待つこと20分少々、待望の特上のうな重が運ばれてくる。乾杯ならぬ「乾フタ」の号令に合わせてフタをとる。目の前にあらわれたウナギの大きさと美味しそうな色艶に思わずゴクリ、歓声があがる。



天然のうなぎは普通その魚体が養殖のものとは比べて大きく太い。皮が硬く身が厚い。そして脂が濃いのが特徴だ。養殖ものに慣らされている為、人によってはその濃密さに引いてしまうこともあるらしい。食べられない人がいるのではないかと少々心配もしていたが健康家の人ばかりで感動の声しきりの中で全ての人が完食。大満足の昼食となりました。うな重の「重」は重箱に入っているからだという説が多いが、大正軒のうな重はご飯の間にもう一切れ入っていて、まさにウナギが重なっているのである。旅は続き、桂浜の龍馬記念館を経て、ひろめ市場での夕食（本物の鰻のタタキ）。これまた全員大満足であったのは言うまでもない。

※仁淀川 「仁淀ブルー」と呼ばれる清流でさらに西にある四万十川に次いで有名な川。季節的には屋形船での川下りもできる。

忘れられない言葉

F氏には、三十数年経った今も大事にしている言葉があります。それはあるセミナーの講師から教えられた言葉で、「志は高く、頭は低く、実践は足元から」というものです。「人間はどのような生き方をするかが大事である。人生には確かな生きる指針が必要である」という、講師の強い言葉が今も耳に残っています。「志」とは、心の指す方向であり、理想や目標のことです。「頭は低く」とは、心の姿勢であり、何事も謙虚な心を持って臨むことが大切だという意味です。わからないことは「どうか教えてください」とへりくだって他人に聞く姿勢です。F氏は自分のことよりも他人のことを先にする、自利より利他を図る生き方を目標にしています。

この言葉に出会ったF氏は、明るい挨拶と返事、後始末という身近なことにも率先して取り組んでくれました。これからも、この言葉を人生の指針として生きていこうと決意しています。

一般社団法人 倫理研究所 職場の教養10月号より